

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第6回
 第2章 前川康男先生と今西祐行先生
 その3 『肥後の石工』、「一つの花」

童話雑誌『びわの実学校』の校長は、雑誌を主宰されていた坪田譲治先生だが、副校長は、創刊号からの編集長の前川康男先生（1921～2002年）だろう。母宮川ひろがはじめて投稿した短編「たからもの」が第16号（1966年5月）に掲載されたあと、作品を見てくださるようになった今西祐行先生（1923～2004年）は、母の担任ということになる。私は、子どものころから、今西先生に、そして、前川先生にもお目にかかる機会があった。

童話と小説

1958（昭和33）年、前川康男先生は、鈴木隆、永井萌二とともに小説の同人雑誌『田園』を創刊し（発行月の記載なし）（注1）、その後、同人を少しふやしながら第4号（1971年4月）まで刊行する。創刊のときの同人3人は、かつて、早大童話会の『童苑』学徒出陣号に童話を書き残して出征した人たちである。創刊号巻末の「あとがき」に寄せられている三つの小さな文章のうち、（M）の署名が前川先生のもののはずだ。

ぼく達三人は、今まで童話を書いてきた。ろくに童話も書けないのに小説を書こうとは、と言われるかもしれない。また、そのくらいの出来栄えかもしれない。だが三人とも小説を書こうと思つた。（中略）

私個人としては、人間を描くための一つの修業と考えている。童話で子どもを描くのも、小説で大人を描くのも同じでありたい。童話を学生の時から入れると、もう二十年書いてきたわけだが、ずっと童話の形式で書いてきて、どうしても甘い。人間の描き方がイージーになってしまう。自分でこの状態を突きぬけたい、そんな気持である。

前川先生は、この創刊号に「塗り込められた絵」、第2号（1967年11月）に「薪の塔」という短編小説を発表している。

「薪の塔」は、1946（昭和21）年6月の上海市郊外、江湾（キャンワン）集中営という収容所が舞台だ。前川先生自身を思わせる将校の小淵の視点で語られていく。3月末ごろから兵隊たちがつぎつぎに復員し、残された2千人も、もうあと12、3日で日本に帰るといふ日、電話線の修理をしていた兵長の嵯峨が感電死する。もしかしたら、自殺ではないか。かつて嵯峨がかかわった大事件と、事件のあとに兵隊がひとり銃殺されたことが明らかになる。以前、航空用ガソリンを酒代わりに飲んで酔った嵯峨は、「おりゃあ……、おりゃあ……、殺したんじゃない。」「帰りたくない……、帰りたくない……、帰れないんだ……。おりゃあ……、おりゃあ……帰れないんだ……。」「と、うわ言をいっていた。

復員を待つ兵隊たちのからっぽの心が描かれる。連隊本部の副官がいう。――

「いいか小淵君、兵隊は病気にかかっているんだ。」「そうだ、帰国病というな。ホームシックだ。」小淵も、「おれの敵は、彼らの郷愁だ。」と考える。

部隊葬で、死んだ嵯峨を焼くために積み上げられたのがタイトルの「薪の塔」だ。小説「薪の塔」のおしまいに描かれるのは、復員船の出航である。盲腸のために船にのせてもらえない若い兵隊の「置いて行かないでくれえー。」という声が聞こえた瞬間、小淵の目に故郷のサフランの花畑が浮かぶ。「あのサフランの畑が見たい、小淵は、汽笛の響きの中でそう思った。にじむように郷愁が胸にひろがった。」——これが小説のしめくくりだ。

すさまじい小説である。しかし、そのすさまじさを見つめる小淵の目が公平で澄んでいるから、どこか美しい小説でもある。小説は、前川先生の自筆年譜（インタビュー・神宮輝夫『現代児童文学作家対談4 今西祐行・大石真・前川康男』偕成社1988年所収）の1945（昭和20）年の記述「上海市江湾鎮の収容所に抑留される。コレラで戦友を失う。」を思い出させるが、どこまでが事実かはわからない。それでも、小説の内容は前川先生にとってひどく切実なもので、それを子どもを読者として想定しないものとして書いたのだろう。

「小淵信吾が、針ヶ谷一郎を見つけたのは、銀座裏の小さな酒場だつた。」——『田園』創刊号に掲載された「塗り込められた絵」の書き出しだ。針ヶ谷は、敗戦後の収容所で、将校だった小淵の当番兵として、けがをした小淵を付きっきりで看護してくれた。だが、針ヶ谷は、戦後十年あまりのちの小淵との再会をあまり喜ばない。「不意の闖入者」が忘れようとしている過去を呼び出したというふうなのである。そして、小淵の記憶もよみがえってくる。

「復員文学」としての『肥後の石工』

今西祐行先生も、『田園』第2号から同人にくわわった。「あとがき」の小文には「私は小説の勉強をしたいと思うのです。」と記しているが、作品はのっていない。同じく「あとがき」で、鈴木隆が「今西祐行君も、目下毎日新聞（ママ）（『毎日中学生新聞』日曜版一宮川注）に「浦上の旅人たち」を連載中で間に合わなかった。」と書いている。

1969（昭和44）年に実業之日本社から刊行された『浦上の旅人たち』は、明治初年、かくれキリシタンとして信仰を守りつづけてきた長崎県浦上村の人びとが各地に離散させられた、その旅をひとりの少年を主人公に描いた長編である。

今西先生には、この前にも長編がある。『びわの実学校』創刊号（1963年10月）から連載された前川康男先生の「ヤン」につづいて、第2号（63年12月）から6回にわたって掲載された「肥後の石工」だ（井口文秀絵）。これも、かなり書き直されて単行本になった（実業之日本社1965年）。

鹿児島町の中央を流れる甲突川には、川上から玉江橋など石造りの美しいめがね橋が五つかかっている。天保のころに、城主島津斉興が肥後の国からすぐれた石工を呼んでかけさせたものだ。これらの橋には秘密があった。どの橋も、真ん中の石をはずすと、重力の関係でつぎつぎと石が落ち、簡単に取りこわせる。橋を落として城を守る仕組みである。

この秘密がもれないように、工事のあと、石工たちは、全員「永送り」になっらしい。人目につかないように刺客がさしむけられ、国境あたりで切られたのだ。ところが、石工頭の岩永三五郎だけは、切られずに帰ってくる。三五郎を追ってきた徳之島の仁という侍は、街道をそれて川原におりては石をしらべる三五郎をとうとう切れなかった。侍は、三五郎の宿をわざわざねてきて、「おはんは、わしにはようわからんが、えらいおかたにちがいない。」(引用は『今西祐行全集』9、偕成社 1987 年による。以下も同じ) といい、かわりに川原こじきを切って、その首をもって帰ったのだ。三五郎は、川原こじきが遺した幼い姉弟をつれて、故郷の村にもどる。

帰郷後の三五郎は、ほとんど口もきかなかったが、1 週間ほどたった夜中に突然起き出して、妻に「おのぶ、おきて、わしの頭ぼそってくれ」という。頭をそれられた三五郎は、寒い夜なのに井戸端で何杯も水をあびて、ようやく、妻に薩摩の国で起こったことを打ち明ける。

あくる日、村の人たちが三五郎の家にあつまった。おのぶがふれてまわったのだ。

三五郎は、みんなのまえで、
「岩永三五郎は死にもうした。……」
そういつて、ながいあいだたたみに頭をつけた。

私が最初に『肥後の石工』を読んだのは小学 5 年生のころだった。その後も何回か読んでいたが、今回、久しぶりに読み直して、岩永三五郎のすがたに今西先生の出征と復員とが重なってきた。このことは、今西先生も、神宮輝夫先生との対談で語っている。

「自分が三五郎だったらどう生きるだろうかと考えるんです。(中略) 私が仁であればどう生きるだろうとか、なにかそれぞれ歴史を借りて自分を試しているようなところがあるんです。

それは、ぼくがひよんなことで戦争中に命が助かって生きているという現実があるわけです。それと三五郎は、伝説に近い話ですけれど、ひとりだけ助けられて肥後の国へ帰ってきます。何か三五郎の気持ちがわかるような気がするのです。」(『現代児童文学作家対談 4』前掲)。

『肥後の石工』は、今西先生のいわば「復員文学」(注 2) なのではないか。

「死がこちらをむいた」

『肥後の石工』や『浦上の旅人たち』は、小説的な長編だが、いずれも歴史物語だ。今西先生の戦争体験を描いた作品は、まず、「一つの花」や「ヒロシマのうた」などの短編として発表された。

先生に、「一つの花」のを中心にインタビューをして、記事を書いたことが

ある。『日本児童文学』（1985年4月）の特集「教材の中の児童文学」に掲載された「作家に聞く―「教材としての児童文学」をめぐるふたつの午後―」（注3）である。「ふたつの午後」の一つめが今西先生とお話した午後で、もう一つの午後があまんきみこさんとの時間だった。今西先生の「一つの花」は、はじめ、民間教育団体が平和教材としてさかんに採用し、その後、小学4年生の国語教科書にとられるようになる。（注4）

インタビューの録音から、おふたりのことばを引用して記事を書いた。原稿は、おふたりにお送りして見ていただき、確認していただいた上で雑誌に掲載した。特に、今西先生の記事は、先生のことばが多い。読み直すと、たいへん貴重なものに見える。記事をなぞりながら、あらためて紹介したい。

インタビューは、1985（昭和60年）1月17日の午後、当時の先生のお宅におじゃまして行った。今西先生が61歳、私は29歳で、仙台の教員養成大学の教員になって2年めのころだった。お宅は、中央本線藤野駅から山のなかへ入った、神奈川県と山梨県の県境の近くにあった。山なみをのぞむ二階の部屋でお話を聞いた。

「一つの花」で、おとうさんが戦争に行く日、ゆみ子は、おかあさんにおぶわれて遠い汽車の駅まで送るけれども、まずは、先生自身の出征のことをお聞きした。『童苑』学徒出陣号のころのことだ。（注5）。

「いよいよ学校を途中でやめて、みんなで行くことになったとき、戦死することだってあるんだなと思いましたね。いくら新聞が激戦を報じても、その死は、わたしの方をむいていなかった。それが出征するとなったら、あ、死がこちらをむいたなという実感がありましたですね。」

先生は、兵隊検査のためにいったん郷里へ帰ったものの、すぐに上京し、入隊までは毎日大学の授業に出席したという。「それまではサボれるだけサボっていただけですけどね。とたんに、おしくなりましてね。」――先生は、笑っておっしゃった。「まあ、またこの学校にもどれるかなと、やっぱり考えましたよね。」童話会の仲間とすごす機会も、ますます多くなったとのことだった。

明治神宮外苑競技場での出陣学徒壮行大会は、行かないと教練の検定をくれないぞというデマもとんだが、とうとう出かけなかった。そのころ、東京、上野、新宿の駅頭には、六大学の応援団が待ちかまえていて、タスキをかけた出陣学生がとおると、壇の上にあげて、母校の校歌をうたってくれたという。先生は、それも、タスキをはずしてやりすごした。

「あんまりお祭り気分で行きたくない。もっと真剣に出征したい。自分が戦争に行くということを可能なかぎり考えて出征したい。そんな気持ちがありましたですね。」

このインタビューの数年前に自民党が小学校の国語教科書を攻撃した際、「一つの花」は、出征の見送りが子どもを背負った妻だけとはおかしいと批難された（自

由民主党広報委員会新聞局『いま、教科書は…——教育正常化への提言』1980年)。あのころ、出征兵士の見送りといえば、隣近所をあげての行事だったはずなのに、作品は、事実をねじまげて、反戦と平和をうたいあげているというのである。これについて、今西先生は、戦争末期にはそういうことだってあったと話して下さったが、「一つの花」のひっそりした出征は、何より、先生が経験した学徒出陣の妙なにぎやかさに対する反発のあらわれだったにちがいない。兵士たちは、いさましく戦場へむかっただけでも、最愛の者との別れをおしみたい、それが彼らの本音だったのではないか。「わたしは、その本音が書きたかった」——先生は、そうもおっしゃった。

今西先生は、広島の大竹海兵団に入る。そこから、土浦航空隊、鹿児島航空隊、館山の砲術学校をへて、さらに呉の陸戦隊に配属になる。この隊は、原爆投下直後の広島へ救援に行く。先生は、広島で死体の山を前にして、ようやく戦争の悲惨に出会ったのだという。この体験が「ヒロシマのうた」(国分一太郎編『日本クオレ』2、小峰書店1960年所収)に結晶したことはよく知られている。

父親の物語

「一つの花」に関していえば、作品のモチーフが発見されたのは、むしろ戦後になってからのようだ。今西先生の自筆年譜(『今西祐行全集』別巻、三井喜美子編『今西祐行研究』偕成社1998年所収)を確認すると、1949(昭和24)年に結婚、翌年には長女が誕生する。このころは、勤め先の出版社を転々としていた。

「やっぱり、はじめての子どもというのはかわいいですよ。自分の子どもをだいたときに、ああ、もうこの子の上に焼夷弾がふってくることはないんだなと思いましたですね。もしも、いまが戦争中だったら、この子をおいて行かなければならない。このときになって、ほんとうに戦争がすんでよかったなと実感しました。」

先生が子をもつ父親になったとき、「一つの花」が生まれた。作品は、1953(昭和28)年11月の『教育技術小二』誌上で活字になった。

こんな話もうかがった。先生は、呉の陸戦隊時代、隊長に命ぜられて、手紙の検閲関係をしていたことがあった。兵隊たちが家族などにあてた郵便のなかに、軍の秘密がもらされていないか、戦意を阻喪するようなことが書かれていないか、チェックするのが役目だった。見ていたなかに、のこしてきた子どもにあてた、全文カタカナ書きの手紙があったという。

「何ちゃんとかって書いてあるんですね。ところが、内容は、その子のおかあさん、つまり奥さんあてのラブレターみたいなものでした。それが非常にいいですよ。また、それを書いたのが下士官なんですけど、兵隊の顔さえ見ればぶんぐっているような、おそろしいひとでした。手紙を書いたのがその下士官だとわかったとき、人間というのはふしぎなものだなと思いましたね。なぐるのは、さびしさのうらがえしだったんでしょうか。」

いっしょに酒を呑んだとき、先生は、知らん顔で「兵曹、お子さんいくつかね」とたずねてみた。すると、「ひとつ半になった」という。たとえカタカナで書いたとしても、一歳半の子どもに手紙が読めるはずがない。それでも、彼は、それを書かずにはいられなかった。下士官のこの手紙は、長く先生の心にのこった。

「「一つの花」では、母親が何もいわないじゃないかと、現場の先生たちからよくいわれます。しかし、それは、ゆみ子という子どもを通じて、おとうさんとおかあさんの夫婦の愛情も、そこに語っているつもりなんです。」

「「一つの花」をお書きになったとき、戦争の体験を子どもたちに伝えたいという思いがありましたか」、そんなことをお聞きすると……。

「いやあ、『教育技術』という雑誌のすみっこに書いたときには、ただ、原稿料がほしい、それから、ひとつでも自分の作品を書きたい、それだけでしたね。」

そうだったのかもしれない。だが、「一つの花」は、いくつもの教科書にとられ、たくさん子どもたちの手にわたることになった。先生は、戦争のなかで人びとが何を考え、何をして生きていたのか、そういう記録にはのこらないようなことを伝えたいとは思って話してくださった。だが、作品を十分に読みこまずに、簡単に反戦というテーマを引き出すやり方には抵抗を感じる、「一つの花」は戦争を抜いては成り立たない作品ではあるが、親子や家庭という問題も読みとってほしいともおっしゃった。

「教科書ですから、半強制的に読まされるわけですが、子どもたちが大人になって、また子どもをもって、そのときに、ああ、あの作品は、こういう話だったのかと思ってくれたら、いちばんいいですね。」

戦争に行くおとうさんを送る道みち、ゆみ子は、「一つだけちょうだい」「一つだけちょうだい」といって、おかあさんがもっていた、おにぎりをみんな食べてしまう。駅に着いてもまだ「一つだけ……」を繰り返すゆみ子に、おとうさんは、一輪のコスモスの花をゆみ子にわたす。――「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、だいじににするんだよう……」（引用は『今西祐行全集』4、偕成社1987年による。以下も同じ）

それから、十年の年月がすぎました。

ゆみ子は、お父さんの顔をおぼえていません。自分にお父さんがあったことも、あるいは知らないのかもしれませんが。

でも、いま、ゆみ子のとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱいにつつまれています。

「一つの花」では、コスモスの花があざやかに描かれている。コスモスは、花壇につくる花ではない。道ばたや垣根に群れて咲く。その感じが好きだ、コスモスは、白と濃い赤とピンクの花が入りみだれて咲いているのがいい、と今西先生はいった。戦後最初に東京へ出てきたとき、焼けあとに咲くコスモスを見つけて、きれいだと思ったことがあるともうかがった。人間の思いは決して消えずに伝わる、それが自分の文学をささえる大きなテーマだ、先生は、いつか、そんなふうに述べられた（「不滅の定律」『冬の祭り』偕成社 1981 年所収）。「一つの花」のコスモスは、消えることのない父親の思いのみごとな象徴にもなっている。（注 6）

「一つの花」は、小学国語教科書の現行版（2020 年度版）でも、4 社すべてに掲載されている。（注 7）

（第 2 章「前川康男先生と今西祐行先生」おわり）

（注）

- 1、『田園』第 2 号の「あとがき」で、前川先生が、この雑誌のタイトルの由来について書いている。――「心遠きところ 花静かなる田園あり」（坪田譲治）／『田園』という雑誌名は、坪田さんが、いつか書いてくださった色紙からいただいた。」（カッコ内原文）『田園』につどった同人たちには、小説家であり童話作家でもある坪田先生へのあこがれがあったように思う。
- 2、「復員文学」ということばは、野崎六助『幻視するバリケード 復員文学論』（田畑書店 1984、私が読んだのは、その復刊、インパクト出版会 1997 年）で学んだ。野崎のいう「復員文学」とは、全共闘運動を経験した人たちが書いた「全共闘小説」のことで、太平洋戦争からの復員のことでない。
- 3、宮川健郎『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍 1993 年）に収録した。
- 4、1974 年度版・日本書籍 4 年下にはじめて掲載された。
- 5、今西先生は、『童苑』学徒出陣号について、神宮輝夫先生との対談（『現代児童文学作家対談 4』前掲）でも、三井喜美子さんによるインタビュー（「今西祐行＝私の文学を語る」『今西祐行研究』前掲所収）でも言及している。
- 6、今西先生は、私のインタビューで語ってくださったことと重なることを、エッセイ集『生きること 耕すこと』（家の光協会 1989 年）に収められた「一つの花を」などでも述べている。
- 7、4 社のうち、学校図書 4 年上は、教科書の本編ではなく、資料編に掲載している。

（付記）本文中にも記しましたとおり、宮川健郎「作家に聞く―「教材としての児童文学」をめぐるふたつの午後―」（『国語教育と現代児童文学のあいだ』前掲所収）と重複する部分があることをおことわりします。

第2章「前川康男先生と今西祐行先生」関連年表

- 1921（大正10）年 12月25日、前川康男、東京府東京市京橋区に生まれる。
- 1923（大正12）年 10月28日、今西祐行、大阪府中河内郡に生まれる。
- 1939（昭和14）年 4月、前川康男、早稲田大学附属第一高等学院入学。早大童話会に入り、坪田譲治宅へもたびたび行くようになる。
- 1941（昭和16）年 4月、今西祐行、早稲田大学附属第二高等学院入学。
- 1942（昭和17）年 4月、今西祐行、早大童話会に入会。坪田譲治をはじめ、前川康男らを知る。
- 1943（昭和18）年 12月1日、前川康男、今西祐行学徒出陣。
- 1945（昭和20）年 8月6日、広島に原子爆弾投下。7日、今西祐行、配属されていた呉の陸戦隊から救援にむかう。広島で5日間を過ごす。15日、前川康男、上海市郊外で敗戦をむかえる。日本からもっていった小川未明の童話集『赤い蠟燭と人魚』を焼く。10月、今西祐行復員。
- 1946（昭和21）年 6月末、前川康男、両親のいる札幌に復員。しばらく、素人人形劇団をつくって北海道を巡回公演したり、札幌の出版社で編集の仕事をしたりする。
- 1949（昭和24）年 12月、前川康男、札幌での勤めをやめ、上京。
- 1950（昭和25）年 3月、前川康男、新潮社にアルバイトに行き、そのまま11年間つとめる。
- 1952（昭和27）年 前川康男「オリオン星座」（『児童文学研究』第9号）。
- 1953（昭和28）年 11月、今西祐行「一つの花」（『教育技術小二』）。
- 1958（昭和33）年 発行月不明、前川康男「塗り込められた絵」（『田園』創刊号）。
- 1960（昭和35）年 12月、今西祐行「ヒロシマのうた」（国分一太郎編『日本クオレ』2、小峰書店所収）。
- 1963（昭和38）年 10月、坪田譲治主宰の童話雑誌『びわの実学校』創刊。前川康男、今西祐行は、編集同人となる。創刊号から前川「ヤン」連載開始。12月、第2号から今西「肥後の石工」連載開始。
- 1965（昭和40）年 12月、今西祐行『肥後の石工』（実業之日本社）。
- 1966（昭和41）年 5月、宮川ひろがはじめて『びわの実学校』に投稿した作品「たからもの」が掲載され（第16号）、今西祐行から作品をよせるようにという葉書をもらう。
- 1967（昭和42）年 9月、前川康男『ヤン』（実業之日本社）。11月、前川康男「薪の塔」（『田園』第2号）。
- 1969（昭和44）年 6月、今西祐行『浦上の旅人たち』（実業之日本社）。9月、前川康男『魔人の海』（講談社）。
- 1987（昭和62）年 7月、『今西祐行全集』全15巻＋別巻1刊行開始（偕成社）
- 2002（平成14）年 10月14日、前川康男没。80歳。
- 2004（平成16）年 12月21日、今西祐行没。81歳。